

『甘澤謠』『圓觀』

および蘇軾「僧圓澤傳」訳注

加納 留美子

凡例

・書名および作品名、引用した原文は正字体（旧字体）にて表記し、書き下しや現代語訳、本文は常用字にて表記した。また、書き下しでは現代仮名遣いを用いている。

・作品名であり登場人物名でもある圓觀（円観）および圓澤（円沢）は、統一して正字体を用いている。作品を指す場合は「圓觀」または「圓澤」と、人物を指す場合は圓觀または圓澤と表記した。

はじめに

「圓觀」⁽¹⁾は、晩唐の袁郊撰『甘澤謠』に収載される唐代伝奇の一つである。その大筋は次の通りである——唐の

時代、李源は安史の乱で父が殺害されたことを契機に、洛陽の恵林寺に隠棲していた。ある日、無二の友である同寺の僧侶圓觀と旅に出たところ、旅先で三年間妊娠したままの女性を見かける。すると圓觀は、彼女の腹の中にいる胎児が来世の自分であると告白し、李源に後事を託して死去する。李源は圓觀の死後に誕生した赤子を見に行き、その反応から赤子が本当に圓觀その人だと確認した。十数年後、李源は圓觀と約束した杭州の天竺寺を訪ねると、牧童となった転生後の圓觀と再会を果たしたのだった。

「圓觀」は早くから人々に知られた作品で、特に作中の詩に見える「三生石」という語句は、同時代の詩人によって典故とされていた。⁽²⁾そして宋代以降、「圓觀」は様々な文献に採録されていく。その中でも注目すべき文

献として、五代宋初の僧侶・贊寧^{さんねい}（九一九—一〇〇二）

が撰した『宋高僧傳』（端拱元年〔九八八〕完成）収載の

「唐洛京慧林寺圓觀傳」、そして北宋の士大夫・蘇軾^{そしよく}

（一〇三七—一一〇一）が撰した「僧圓澤傳」^{そうえんたくでん}（制作年は後述）

が挙げられる。両者は原作「圓觀」をそのまま採録した訳ではなく、随意に加筆刪削した箇所が少なくない。

『宋高僧傳』は唐から宋にかけての高徳の僧侶たちの伝記を網羅的に記したもので、「圓觀」を採録したものも、僧侶を題材にした伝奇だからこのことと理解できる。⁽³⁾しかし蘇軾の場合、唐代伝奇を題材に選び、更に意図的なアレンジを加えた作品は、唯一「圓澤」が確認できるだけである。

蘇軾が「圓澤」にてどのようなアレンジを加えたのか、その結果原作「圓觀」との間にどのような相違点が生じているかといった問題については、既に別稿にて論じている。⁽⁴⁾しかしながら紙幅の関係で、先の論考では「圓觀」および「圓澤」の原文とその概要を紹介するに留まり、書き下しや細かな語釈は載せられずにいた。本論は二作品の訳注を行うことで別稿の不備を補ったもので、併せて今後筆者が関連研究を進める上での基礎とするものである。

1. 「圓觀」および関連作について

1-1. 『甘澤謠』と撰者袁郊について

訳注に入る前に、それぞれの作者および作品の基本情報を説明しておく。

唐代伝奇『甘澤謠』^{かんたくよう}の撰者袁郊^{えんこう}は、晩唐の人で字は之乾^{かん}（一に之儀）。『新唐書』卷一五一袁滋伝や、同卷七四宰相系表四下袁氏にその名が見える。⁽⁵⁾史書の記述によれば、父の袁滋は憲宗（在位八〇五—八二〇）の時代に宰相を務めた人物で、袁郊本人も官職を歴任したことが分かる。また北宋の計有功『唐詩紀事』卷六五「袁郊」では、咸通年間（八六〇—八七三）に祠部郎中、昭宗の治世（八八八—九〇四）に翰林學士を務め、さらに晩唐を代表する詩人温庭筠^{おんていじん}とも詩を唱和したと説明され、能吏にして詩人としての才もあつたことが知れる。⁽⁶⁾

『甘澤謠』の名は、各種文献に記載された。『新唐書』卷五九小説家類に「袁郊甘澤謠一卷」とあるのをはじめ、南宋・晁公武『郡齋讀書志』卷一三に「唐袁郊撰。謫異の事九章を載す。咸通中、久雨臥疾に著す所なりて、故に『甘澤謠』と曰う（唐袁郊撰。載謫異事九章。咸通中、久雨臥疾所著、故曰『甘澤謠』）」、更に南宋・陳振孫『直齋書

録解題』卷一一に「唐刑部郎中袁郊撰。記する所凡そ九条。咸通戊子自序あり、其の春雨沢応、故に甘沢謡を成すの語有るを以て、遂に以て其の書に名づく（唐刑部郎中袁郊撰。所記凡九條。咸通戊子自序、以其春雨澤應、故有甘澤成謡之語、遂以名其書）」とある。興味深いことに、後者の二文献では『甘澤謡』という書名にも言及している。いずれも降雨に因んだ書名とするが、『郡齋讀書志』は咸通九年（八六八）長雨に病臥した折に編んだ故に、また『直齋書錄解題』は「春雨澤應」という語を承けて、と異なる由来を説いている。

『甘澤謡』の原本は既に失われて久しいが、その記述は種々の類書や詩話・筆記等に採録されてきた。⁽⁷⁾ 早期の例では、北宋初期の類書『太平廣記』に『甘澤謡』から引用した「圓觀」を含む八作品が載る。⁽⁸⁾ これでは『郡齋讀書志』や『直齋書錄解題』の説明する「九章（九條）」に対して一作足りないことになるが、現代の研究者は『太平廣記』卷一九四に載る「聶隱娘」（『太平廣記』では『傳奇』を出典とする）を含めることで全九作となる、と説明する。⁽⁹⁾

この他、冒頭に挙げた北宋・贊寧『宋高僧傳』には『甘澤謡』に取材した二条が載り、北宋・曾慥『類説』

卷三六ならびに北宋・朱勝非『紺珠集』卷一一には六条が抄録される。いずれの文献も、等しく「圓觀」を採録していることに注意したい。加えて、「圓觀」だけを採録した文献には、北宋・釋惠洪『冷齋夜話』、南宋・胡仔『苕溪漁隱叢話』、南宋末・陳元靚『歲時廣記』が挙げられる。

やがて明代に至ると、『太平廣記』を基に再編された『甘澤謡』一書が編まれた。そちらは、明・毛晉『津逮秘書』や清・張海鵬『學津討原』等の叢書に収められている。⁽¹⁰⁾

1・2. 蘇軾「僧圓澤傳」について

続いて、唐代伝奇「圓觀」を改作した北宋の蘇軾についても確認しておく。

蘇軾（一〇三七―一一〇二）、字は子瞻、^{あざな}号は東坡居士。眉州眉山（現在の四川省眉山）の人。晩唐を生きた袁郊に遅れること約二百年、北宋中期に活躍した士大夫（知識人）である。若くして科挙に及第するが、官途においては所謂新法・旧法兩派の政治的対立に翻弄され、栄達を遂げる一方で三度の左遷を経験するという波乱に満ちた人生を辿った。⁽¹¹⁾

古来中国にあって、科擧に及第して官僚になることは、政治的才覚に加えて文学的才能を備えた存在であることを意味した。蘇軾もまた著述を能くし、現存する詩に限っても優に二千首を超える。その作品は生前より広く世の人々に愛唱され、死後も文学的泰斗として仰望されてきた。

高級官僚という立場にありながら、蘇軾は不可思議な存在・超自然的な事物へ関心を寄せていた。実際、蘇軾の詩文を検めれば、民間信仰や地方の俗信に関する記述や、六朝志怪や唐代伝奇に想を得た表現が少なくない。本論で訳注を施す「僧圓澤傳」(『文集』卷一三、¹²以下、作品名を「圓澤」と省略)は、正にこの種の好例と言えるだろう。

「圓澤」の末尾に、「本作は袁郊『甘澤謠』より出で、天竺寺(寺の名、現在の浙江省杭州市にある)に関する故事なので、当寺の僧に書いて贈った。旧文は煩雑冗漫だった為、大いに刪改した(此出袁郊所作『甘澤謠』、以其天竺故事、故書以遺寺僧。舊文煩冗、頗爲刪改)」との自注(作者自身による注釈)が附されており、蘇軾が原作を意図的に改変させたことが強調されている。事実、本論で示す原文と現代語訳を見れば明らかなように、蘇軾は「圓觀」に対して全体的に手を加え、「圓觀」の些か冗長な表現を整理

しており、その結果、作品展開において原作以上の一貫性が獲得されていることが分かる。¹³⁾

自注に「天竺寺の僧侶の贈った」と述べるが、天竺寺は現在の浙江省杭州市の古刹で、従って「圓澤」もまた蘇軾の杭州滞在中に撰した作品と推測される。蘇軾が杭州に滞在した時期は主に二度あり、一度目は熙寧四年(一〇七二)から同七年(一〇七四)の杭州通判(副知事)として赴任した期間、二度目は元祐四年(一〇八九)から同六年(一一〇九)の知杭州軍州事(知事)として赴任した期間が該当する。いずれの時期も蘇軾は天竺寺の僧侶たちと親交があり、¹⁴⁾それ故に制作年代を特定することは困難である。

加えて、「圓澤」には制作時期とは別の困難がある。一瞥して分かるように、袁郊『甘澤謠』では「圓觀」であつた名が、蘇軾に至って「圓澤」に変じている。夙に先人がその変化に注目しているが、蘇軾本人の説明が無い以上、変化の生じた理由は不明とするしかない。¹⁵⁾

しかし名称の変化によって、「圓觀」受容における、ある傾向を見出せる。前節にて、「圓觀」が後世様々な文献に採録されていると指摘したが、実は蘇軾が「圓澤」を撰したことを境に、「圓觀」ではなく「圓澤」の名で

採録される傾向にあるのだ。⁽¹⁶⁾ 要するに、採録される作品名からも、同時代・後代の文人に対する蘇軾の影響力を認めることができる。

2. 『甘澤謠』『圓觀』訳注

前述の基本情報を踏まえ、本章では『甘澤謠』『圓觀』の訳注を行う。次章の「圓澤」訳注との差異を分かりやすく示すために、原文に各種傍線を挿入している。また、凡例は次のとおりである。

- ・ 原文、書き下し、現代語訳、語釈の順で示す。原文は適宜改行した。
- ・ 語釈に対応する箇所として、本文中に番号①、②…を振った。

・ 本文は張国風会校『太平廣記校』卷三八七（北京燕山出版社、二〇一一年）を底本とし、一部の語釈については李軍評注『『甘澤謠』評注』（中国社会科学出版社、二〇一三年）および張志烈・馬德富・周裕鍇主編『蘇軾全集校注』（河北人民出版社、二〇一〇年）収載『蘇軾文集校注』卷一三「僧圓澤傳」注を参照した。

- ・ 棒線部は、蘇軾「僧圓澤傳」に無い箇所を指す。
- ・ 点線部は、蘇軾「僧圓澤傳」と表現が大きく異なる箇所を指す（ただし、些末な相違は拾わない）。

【原文】

圓觀者、大曆^①末洛陽惠林寺^②僧。能事田園、富有粟帛^③。梵學^④之外、音律^⑤貫通。時人以「富僧」爲名、而莫知所自也。

李諫議源^⑥、公卿^⑦之子、當天寶^⑧之際、以游宴歌酒爲務。父愷居守^⑨、陷于賊中、乃脫粟布衣^⑩、止于惠林寺。悉將家業爲寺公財。寺人日給一器食、一杯飲而已、不置僕使、絕其知聞^⑪。唯與圓觀爲忘言友^⑫。促膝靜話^⑬、自旦及昏。時人以清濁不倫^⑭、頗生譏誚^⑮。如此三十年。

二公一旦約游蜀州、抵青城・峨嵋^⑯、同訪道求藥^⑰。圓觀欲游長安、出斜谷^⑱。李公欲上荊州^⑲、出三峽^⑳。爭此兩途、半年未訣。李公曰、「吾已絕世事^㉑、豈取途兩京。」圓觀曰、「行^㉒固不由人、請出從三峽而去。」

遂自荊江上峽行、次南浦^㉓、維舟山下、見婦女數人儻達錦鐙^㉔、負甕而汲。圓觀望而泣下曰、「某不欲至、恐見其婦人也。」李公驚問曰、「自上峽來、此徒不少、何獨泣此數人。」圓觀曰、「其中孕婦姓王者、是某託身^㉕之

所。踰三載、尚未婉懷²⁶、以某未來之故也。今既見矣、即命有所歸。釋氏²⁷所謂循環也。」謂公曰、「請假以符咒²⁸、遣某速生。少駐行舟、葬某山下。浴兒²⁹三日、亦訪臨。若相顧一笑、即某認公也。更後十二年中秋³⁰月夜、杭州天竺寺³¹外、與公相見之期也。」李公遂悔此行、爲之一慟。遂召婦人、告以方書³²。其婦人喜躍還家、頃之³³、親族畢至。以枯魚酒獻于水濱³⁴、李公往爲授朱字符、圓觀具湯沐、新其衣裝。是夕、圓觀亡而孕婦產矣。

李公三日往觀新兒、襁褓就明³⁵、果致一笑。李公泣下、具告于王。王乃多出家財、厚葬圓觀。明日、李公廻棹³⁶、言歸³⁷惠林。詢問觀家、方知已有理命³⁸。

後十二年秋八月、直詣餘杭³⁹、赴其所約。時天竺佛寺、山雨初晴、月色滿川、無處尋訪。忽聞葛洪川⁴⁰畔有牧豎⁴¹歌「竹枝詞」⁴²者。乘牛叩角、雙髻⁴³短衣、俄至寺前、乃圓觀也。李公就謁曰、「觀公健否。」卻向李公曰、「眞信士矣。與公殊途⁴⁴、慎勿相近。俗緣⁴⁵未盡、但願勤修⁴⁶。勤修不墮、即遂相見。」

李公以無由叙話、望之潸然⁴⁷。圓觀又唱「竹枝」、步前去。山長水遠、尚聞歌聲、詞切韻高、莫知所謂。

初到寺前歌曰、「三生石上舊精魂、賞月吟風不要論。慚愧情人遠相訪、此身雖異性長有⁴⁸。」寺前又歌曰、「身

前身後事茫茫、欲話因緣恐斷腸。吳越溪山尋已遍、卻廻煙棹⁴⁹上瞿塘⁵⁰。」

後三年、李公拜諫議大夫⁵¹、二年亡⁵²。

【書き下し】

圓觀は、大曆末洛陽惠林寺の僧なり。田園を事とするを能くし、粟帛を富有す。梵学の外、音律に貫通す。時人富僧を以て名と爲すも、而して自る所を知る莫きなり。

李諫議源、公卿の子にして、天宝の際に当たりて、游宴歌酒を以て務めと爲す。父澄は居守にして、賊中に陥れらるれば、乃ち脱粟布衣せんと、惠林寺に止まる。悉く家業を寺の公財と爲す。寺人日び一器の食、一杯の飲を給するのみにして、僕使を置かず、其の知聞を絶てり。唯だ圓觀と忘言の友と爲る。促膝静話すること、昼より昏に及ぶ。時人清濁不倫を以て、頗る譏誚を生ず。此くの如くすること三十年なり。

二公一旦蜀州に遊び、青城、峨嵋に抵り、同に道を訪ねて薬を求めんと約す。圓觀長安に遊び、斜谷に出でんと欲す。李公荊州を上り、三峡に出でんと欲す。此の兩途を争うこと、半年なるとも未だ訣せず。李公曰く、「吾

已に世事と絶てり、豈に両京に途を取らんや」と。圓觀曰く、「行は固より人に由らず、請う三峡より出でて去らん」と。

遂に荊より江峡を上りて行き南浦に次り、舟を山下に維げば、婦女数人の幃の錦鎗に達し、甕を負いて汲むを見たり。圓觀望みて泣下りて曰く、「某の至るを欲せざるは、其の婦人を見るを恐るればなり」と。李公驚きて問いて曰く、「峡を上りて来たるより、此の徒少なからず、何ぞ独り此の数人を泣く」と。

圓觀曰く、「其の中の孕婦の姓王なる者、是れ某の託身するの所なり。三載を踰ゆるも、尚お未だ婉懷せざるは、某の未だ来ざるの故を以てすればなり。今既に見たれば、即ち命の帰する所有らん。釈氏の謂う所の循環なり」と。公に謂いて曰く、「請う仮るるに符咒を以てし、某をして速生せしめよ。少や行舟を駐め、某を山下に葬れ。浴児すること三日にして、亦た訪臨せよ。若し相顧みて一笑すれば、即ち其れ公を認むるなり。更に後十二年の中秋月夜、杭州天竺寺の外に、公に相見ゆるの期とせん」と。

李公遂に此の行を悔いて、之の為に一働す。遂に婦人を召し、告ぐるに方書を以てす。其の婦人喜躍して家に

還り、頃之にして、親族畢く至る。枯魚と酒を以て水浜に献じ、李公往きて為に朱字を授く。圓觀具に湯沐し、其の衣装を新たにす。是の夕、圓觀亡して孕婦産みたり。李公三日にして往きて新児を観れば、襁褓就ち明じ、果たして一笑を致す。李公泣下り、具に王に告ぐ。王乃ち多く家財を出し、厚く圓觀を葬る。明日、李公棹を回らせ、言に恵林に帰る。觀の家を詢問すれば、方に已に理命有るを知る。

後十二年秋八月、直ちに余杭に詣り、其の約する所に赴く。時に天竺仏寺、山雨初めて晴れ、月色川に満ち、尋訪する処無し。忽ち葛洪川の畔に牧豎の「竹枝詞」を歌う者有るを聞く。牛に乗りて角を叩き、双髻短衣なりて、俄かにして寺前に至れば、乃ち圓觀なり。李公就ち謁して曰く、「觀公健なるや否や」と。却りて李公に向きて曰く、「真に信士なり。公と途を殊にすれば、慎みて相近づく勿かれ。俗縁未だ尽きざれば、但だ願わくは勤修せよ、勤修墮ちざれば、即ち遂に相見えん」と。

李公以て話を叙する由無く、之を望みて潸然たり。圓觀又た「竹枝」を唱し、歩歩前去す。山長くして水遠かれど、尚お歌声を聞く。詞切にして韻高く、謂う所を知る莫し。

初め寺前に到りて歌いて曰く、

三生石上旧き精魂^{ふる}

月を賞し風を吟じて論ずるを要^{もち}いず

慚愧す情人の遠くより相訪ぬるを

此の身異と雖も性長らく有り

寺前に又歌いて曰く、

身前身後事茫茫たり

因縁を話さんと欲するも断腸するを恐る

呉越の山川尋ぬること已に遍く

煙棹^{くとう}を却回して瞿塘を上らん

後三年、李公諫議大夫を拝し、二年して亡^しす。

【現代語訳】

圓觀は、大暦年間末〔に居た〕洛陽恵林寺の僧侶である。田園を管理することに巧みで、財産を豊富に蓄えていた。〔また〕仏教の学問以外に、音律にも通じていた。当時の人々は「圓觀を」「富僧どの」と呼んでいたが、その出自を知る者はいなかった。

諫議大夫の李源は、高官の息子であり、天宝年間には主に遊宴や歌酒に関わる役職を担っていた。〔しかし〕父の愷が東都留守の時、逆賊に殺害されてしまったため

に、李源は徹底した節制生活を送るべく、恵林寺に身を寄せた。自身の家産の一切を寺の公共財産として寄進した。〔李源の寺での暮らしぶりと言え、〕寺人が毎日茶碗一杯の食事と器一杯の水を供するだけで、下僕を置かず、知己との連絡も絶ってしまった。唯一、圓觀とは昵懇の仲となり、昼から晩まで膝を突き合わせて静かに語らった。当時の人々は、李源と圓觀の交流が相応しくないとし、多くの批判が寄せられた。〔しかし非難をもとめせず、二人は〕このような交流を続けて、三十年が経過した。

ある日、二人は蜀州に遊び、青城山と峨眉山にて道人を訪ね、仙薬を求めようと取り決めた。〔洛陽から蜀へ向かうに当たって〕圓觀は長安を訪問し、〔それから〕斜谷に出ようとした。〔二方の〕李源は荊州を遡上し、三峡に出ようとした。これら二つの旅程を巡って争い、半年経っても決定できずにいた。李源が「私は既に世事との関わりを絶っているのに、どうして両京へ向かう道を取れようか」と主張すると、圓觀は「運命はもとより人が決めることではありませんな、どうぞ三峡より参るとしまししょう」と言った。

そして荊州より長江三峡を遡航して南浦に至り、舟を山下に停泊させたと、革製の馬のたづなを色鮮やか

な下ばかりまで届くほど垂らした婦人たち数人が、甕を背負って水を汲むのを見かけた。圓觀はその様子を眺めて涙を流し、「私がここに來たくなかったのは、あの婦人に会うのを恐れた為です」と言った。李源は驚いて、「三峡を遡上して以来、ああした婦人は少なからずいたのに、何故あの数人のことだけで泣くのです」と訊ねた。

すると圓觀は、「あの中の姓が王という妊婦は、私が転生して宿る相手なのです。三年を経過しても、〔彼女が〕いまだに出産できずにいたのは、私が来ずにいた為だったのです。今や出会ってしまった以上、すぐさま〔定められた〕運命へ帰す所となるでしょう。〔これぞ〕仏教の説く輪廻転生です」と述べた。〔更に〕李源へ、次のように願った。「どうか符呪の力を借りて私が速やかに生まれ変わるように手伝ってください。少しの間舟を留めて、私を山のふもとに葬ってください。〔そして〕浴児の儀式を行って三日後、もう一度家へお越しください。もし〔赤子が〕あなたを見て笑ったのなら、つまり〔圓觀である私が〕あなただと分かったということです。加えて〔その笑みを以て〕十二年後の中秋の月夜に、杭州天竺寺の外にて、あなたに拝謁することのお約束としましょう」と。

李源は今回の行動を後悔し、圓觀のために一頻り慟哭した。そしてかの婦人を呼び出し、処方箋を与えて説明してやった。その婦人は大いに喜んで帰宅し、間もなくして親族が勢揃いした。〔それから〕彼らが干物と酒を川辺で献上すると、李源もその場に赴き、朱字〔で書いた呪符〕を授けてやった。圓觀は隅々まで身を清め、衣服を新調した。その日の夕方、圓觀は死去し、妊婦は出産したのだった。

李源が〔浴児の〕三日後に新生児を見に行くと、赤子はすぐさま〔こちらに〕気付き、本当に笑いかけた。李源は涙を流して、一連の事情を王氏に説明した。〔話を聞いた〕王氏は多くの家財を費やして、圓觀を手厚く葬ってやった。翌日、李源は舟を引き返して、恵林寺へと帰った。圓觀の家を訊ねれば、そこではじめて〔圓觀が〕既に遺言を残していたことを知ったのだった。

そして十二年後の秋八月、李源はすぐさま杭州へやって来て、圓觀と約束した場所へ向かった。この時の天竺寺は、山では雨が止んだばかりで、月光が川一面を照らしていたが、〔李源には〕訪ねる心当たりはなかった。不意に、葛洪川の畔に「竹枝詞」を歌う牧童がおり、その声が聞こえてきた。〔牧童は〕牛に乗ってその角を叩き、

みずらの髪型で短衣を着ており、まもなく寺の前に至ると、何と圓觀である「と分かった」。李源がすぐさま拝謁し、「圓觀殿は息災ですか」と訊ねた。「すると牧童は」振り返って李源に向かい、「『あなたは』本当に誠実な人です。『しかし私は』あなたと道を異にしておりますので、慎んでこちらに近づかないで下さい。『あなたの』俗縁はまだ絶たれていませんから、ひたすらに仏道修行に励んで下さい。修行を怠らなければ、いずれお目にかかれましょう」と語った。

李源は言葉を掛けるすべも無く、圓觀を遠くに眺め、さめざめと涙を流した。圓觀は再び「竹枝詞」を歌いながら、一步また一步と歩いて去ってしまった。高く聳えた山や遠くへ続く川の流れの向こうにあって、尚も歌声が聞こえた。言葉は胸に迫り韻は格調高く、「しかし」言う心は理解できなかった。

最初に天竺寺の前に到着して歌ったことには、

この三生石の上にいるのは前世の魂を宿した者ですが、風月を愛で吟じる際にあれこれ論じる必要はありませんまい。かたじけないうちに古き友が遠方より訪ねてくださった、この身は転生したと言え、嘗ての性情は今も変わらず備わっております。

寺前にて再び歌ったことには、

生前のことも死後のことも茫漠として知りようありませんが、あなたとの因縁を語ろうとして断腸の悲しみに襲われることが恐ろしい。呉越の山川は既にひとしきり訪ねましたので、靄立ち込める川面に棹差して（嘗てあなたと訪ねる筈だった）瞿塘へ向かうと思います。

三年後、李源は諫議大夫の職を拝受し、その二年後に死去した。

【語釈】

①大暦 唐代宗の年号（七六六―七七九）。
②洛陽惠林寺 洛陽は現在の河南省洛陽市。唐代は「東京」と呼ばれ、長安（西京）と双壁を為す大都市だった。惠林寺は洛陽にあった寺の名。

③粟帛 穀物と絹織物、転じて財産のこと。

④梵學 仏教の学問。仏学。

⑤音律貫通 音楽の規則、楽律を完全に理解できている。

⑥李諫議源 唐の李源のこと。実在の人物で、正史の『舊唐書』穆宗本紀や同李源伝、『新唐書』李愷伝等に伝が載る。太原文水（現在の山西省吕梁市文水县）の人。先

に別稿（文末脚注4）で指摘したように、「圓觀」で描かれる李源の境遇は、正史が記す内容と一致する箇所がある。また、諫議は諫議大夫という官職の略称。中書省に属し、皇帝の過失を指摘し、いさめる役を担う。李源は諫議大夫に任ぜられたため、このように表記された。

⑦公卿 高官。語釈⑨で示す通り、李源の父李愷は東都留守等の要職を歴任していた。

⑧天寶 唐玄宗の年号（七四二―七五六）。

⑨父愷居守 愷は李源の父の名で、実在の人物。居守は東都留守（別名に東京留守など）のこと。東都すなわち洛陽にて皇帝不在時の留守居役として、民事・財政・軍事等の権柄を握った。七五五年、安祿山が兵乱を起こして洛陽を攻め込んだ際、東都留守として役所に留まっていた李愷は、反乱軍に捕らえられ、処刑された。詳細は『舊唐書』李愷伝および『新唐書』李愷伝等に見える。

⑩脱粟布衣 精米の不十分な穀物に粗末な身なり。脱粟は脱穀に通じ、ここでは糙（脱穀しただけの玄米）の意と解する。転じて、質素儉約の生活を送る意。

⑪知聞 友人や知人。

⑫忘言友 形式的な礼儀にこだわらず、互いの心中を理解し合っている親密な友人。

⑬促膝靜話 相手とひざを突き合わせて座り、静かに語らう。

⑭清濁不倫 不倫は、ふさわしくない、釣り合わないの意。清濁は、文脈に照らして、清貧の生活を送る李源と富裕の僧侶である圓觀の交流を指すと考えらえる。

⑮譏誚 そしる。非難する。

⑯青城・峨嵋 青城山と峨眉山。ともに現在の四川省にある山で、古来道教や仏教の聖地として知られた。

⑰訪道求藥 道は、ここでは神仙の道を求めて修行をする人、道人を指す。関連して、藥は靈妙な仙藥（不老不死の効果を持つ丹藥など）を指す。

⑱斜谷 山谷の名。長安の南に聳える終南山（現在の陝西省にある）にある。中原から蜀へ入るルートの一つとされた。

⑲荊州 現在の湖北省荊州市。古代中国では、荊州より長江を遡上し、三峡（語釈⑳）を経て渝州（現在の重慶市）に至るルートが、蜀へ入る手段の一つとされた。『蘇軾全集校注』『蘇軾文集』卷二三、一三五六頁参照。

⑳三峡 長江の中で、重慶市奉節県の白帝城から湖北省

宜昌市の南津関の区域を指す。急流を成し、兩岸に絶壁の迫る景勝地として名高い。三峡の名は、瞿塘峡・巫峡・西陵峡を総称したもの。

②1 世事 世俗の事柄。世俗のわずらわしい事。

②2 行 「圓澤」の表記に倣い、行止の意とする。行止は行くことと止まること、行動すること。転じて、人の行く末、運命と解する。唐・白居易「琴茶」(『全唐詩』卷四四八)に「窮通行止^{とこしえ}長に相伴う、誰か道^いう吾今往還無しと(窮通行止長相伴、誰道吾今無往還)」とある。

②3 南浦 古代の地名。現在の重慶市万州区。

②4 幃達錦襜 解釈し難い箇所である。幃は革製の馬のたづな。錦襜を「圓澤」に従い「錦襜」に改めれば、錦のように色鮮やかなももひき・下ばかまの意となる。四字は、革製の馬のたづなが下ばかままで達している(垂れている)意となるか。なお、『宋高僧傳』『唐洛京慧林寺圓觀傳』では、同箇所を「縹達錦璫」と表記する。縹は平織の絹製のひもで、璫は耳飾りの玉。絹ひもと耳飾りで飾った女性の姿を指すか。

②5 託身 託生に通じ、転生するの意。古来中国では仏教の影響を受け、人は死後再び母胎に宿り、生まれ変わると考えられてきた。

②6 婉懷 分娩する。出産する。

②7 釋氏 仏教。仏。釈氏は釈迦牟尼世尊の略。

②8 符咒 まじないの総称。符は神秘的な文字や絵が書きつけられたふだ。咒はまじないの言葉。

②9 浴兒 古代中国の習俗で、洗児ともいう。生まれた赤子のからだを洗う習わし。後代の資料になるが、北宋・孟元老『東京夢華錄』卷五に、洗児の日には親戚や客を集めた盛大な会を開くと見える。香料入りの湯を沸かし、湯を入れた盥を飾り立てると、その中で赤子の湯あみを行う。そして招かれた参列者たちは、湯の中に銭を投げ込むなどして会を盛り立てるといふ。

③0 中秋 旧暦八月十五日。一年で最も円く整った月が望めるとされる。唐代には賞月を「翫月」と呼び、観賞の宴を開いて楽しんだ。中秋の風習については、中村喬『続中国の年中行事』(平凡社選書134、一九九四年)に詳しい。

③1 天竺寺 現在の浙江省杭州市にある古刹。天竺寺は上天竺寺・中天竺寺・下天竺寺から成り、下天竺寺が隋の開皇年間(五八一―六〇〇)に創建されたのに対し、中・上天竺寺は五代十国以降の建立である。従って、圓觀の言う天竺寺とは下天竺寺のことと推察される。

『蘇軾全集校注』『蘇軾文集』卷二三、一三五七頁参照。

③2 方書 処方（薬の調剤法）の書かれた紙。ここでは、妊婦の出産を促進するための儀式（語釈③4）の準備方法を指すか。

③3 頃之 少しして。間もなくして。

③4 枯魚酒獻于水濱 川辺にて、干物と酒を供物に捧げる。儀式の様子を描くが、具体的に何に対して祈っているのかは明示されない。

③5 襁褓就明 襁褓は、ここでは赤子の意。就はすなわち、即座にの意。明は明察、はっきりと見抜く。四字は、転生して赤子となった圓觀が、李源に即座に気づいたとの意で解する。

③6 廻棹 船のさおを使って船の向きを変える、もと来た道に戻ることに。

③7 言歸 言は「ここ」と読み、文の調子を整える助字。訳者が案ずるに、「言歸」は経書で用いられる表現で、例えば『詩經』小雅「黃鳥」に「言に旋らん言に帰らん、我が邦族に復らん（言旋言歸、復我邦族）」、同「我行其野」に「爾我を畜せざれば、言に帰らん斯に復らん（爾不我畜、言歸斯復）」と、また『春秋左氏傳』僖公九年に「既に盟うの後、言に好に帰せん（既盟之後、言

歸于好）」とある。「圓觀」の表記もまた、こうした経書に基づいた表現だと考えられる。

③8 理命 遺言のこと。臨終に瀕した人が意識の明瞭な状態で遺す言い付け。

③9 餘杭 余杭郡、すなわち杭州のこと。唐代には度々名称が変更され、杭州あるいは余杭郡と称された。

④0 葛洪川 未詳。杭州周辺に該当する河川名は見いだせないが、下天竺寺周辺の川なのだろう。

④1 牧豎 牧童のこと。

④2 竹枝詞 竹枝は蜀地方で歌われた民間のうた。七言四句から成る。中唐の劉禹錫が夔州（現在の重慶市奉節県）に左遷された折、現地の民歌の形式を用いて「竹枝詞」を作った。「圓觀」でも、同じ形式で詠われている。

④3 雙髻 髻はまげ、もとどり。双髻は、古代日本のみずら（角髪）のような、頭の左右にふたつのまげを結った髪型のこと。男児の髪型。

④4 殊途 道を異にする。ここでは俗世に留まる李源と異なり、圓觀が転生を経て、超越的な存在になったことを言う。

④5 俗縁 俗世間との因縁やしがらみ。

④6 勤修 修行する。ここでは仏道修行に励むこと。

④7 漕然 涙がとめどなく流れる様子。

④8 有 押韻に照らせば、ここは蘇軾「圓澤」に従って「存」と表記すべきだろう。

④9 烟棹 靄立ち込める川面に棹を差し、船を進めること。

⑤0 瞿塘 長江の一部、瞿塘峡のこと。四川省奉節県東にある峡谷で、遡った先には、峨眉山や青城山がある。

⑤1 諫議大夫 官名。語釈⑥を参照。

⑤2 二年亡 李源に関する一連の時系列については、蘇軾「圓澤」語釈②⑥を参照されたい。

3. 蘇軾「僧圓澤傳」原文と現代語訳

続いて、本章では蘇軾「僧圓澤傳」の訳注を行う。凡例は次の通り。

・ 原文、書き下し、現代語訳、語釈の順で示す。原文は適宜改行した。

・ 語釈に対応する箇所として、本文中に番号①、②…を振った。

・ 本文は孔凡礼『蘇軾文集』巻一二（中華書局、一九九九年）を底本とし、一部の語釈については張志烈・馬德富・

周裕鍇主編『蘇軾全集校注』（河北人民出版社、二〇一〇年）収載『蘇軾文集校注』巻一二「僧圓澤傳」注を参照した。

・ 傍線部は、『甘澤謠』「圓觀」に無い箇所を指す。

・ 点線部は、『甘澤謠』「圓觀」と表現が大きく異なる箇所を指す（ただし、些末な相違は拾わない）。

【原文】

洛師^①惠林寺、故光祿卿李愷^②居第^③。祿山^④陷東都、愷以居守死之。子源、少時以貴游子^⑤豪侈善歌^⑥、聞於時。及愷死、悲憤自誓、「不仕不娶不食肉」、居寺中五十餘年。寺有僧圓澤、富而知音^⑦。源與之游甚密、促膝交語^⑧。竟日^⑨、人莫能測。

一日、相約游蜀青城・峩眉山。源欲自荊州^⑩泝峽、澤欲取長安・斜谷路^⑪。源不可、曰、「吾已絕世事^⑫、豈可復道京師哉。」澤默然久之、曰、「行止固不由人。」

遂自荊州路。舟次南浦^⑬、見婦人錦襦^⑭負甕而汲者。澤望而泣曰、「吾不欲由此者、爲是也。」源驚問之。

澤曰、「婦人姓王氏、吾當爲之子。孕三歲矣。吾不來、故不得乳。今既見、無可逃者。公當以符咒助我速生。三日浴兒^⑮時、願公臨我、以笑爲信^⑯。」後十三年中秋^⑰月夜、

杭州天竺寺外、當與公相見」。源悲悔、而爲具¹⁸沐浴易服。至暮、澤亡而婦乳。

三日、往視之、兒見源果笑。具以語王氏、出家財葬澤山下。源遂不果行、反寺中、問其徒、則既有治命¹⁹矣。

後十三年自洛適吳²⁰、赴其約。至所約、聞葛洪川²¹畔有牧童扣牛角而歌之。曰、「三生石上舊精魂、賞月吟風不要論。慙愧情人遠相訪、此身雖異性長存。」

呼問、「澤公健否。」答曰、「李公眞信士。然俗緣未盡、慎勿相近。惟勤修不墮、乃復相見。」又歌曰、「身前身後事茫茫、欲話因緣恐斷腸。吳越山川尋已遍、卻回烟棹²²上瞿塘²³」。遂去、不知所之。

後二年、李德裕²⁴奏源忠臣子、篤孝、拜諫議大夫²⁵、不就、竟死寺中、年八十²⁶。

〔自注〕此出袁郊所作『甘澤謠』。以其天竺故事、故書以遺寺僧。舊文煩冗、頗爲刪改。

【書き下し】

洛師惠林寺は、故光祿卿李澄²⁷の居第なり。祿山東都を陥れ、澄居守を以て之に死さる。子の源、少き時貴游子を以て豪侈にして歌を善くし、時に聞こゆ。澄の死するに及び、悲憤して自ら誓うに、「仕えず、娶らず、肉を

食らわず」と、寺中に居ること五十余年なり。

寺に僧圓澤有り、富にして音を知る。源之と遊ぶこと甚だ密にして、促膝して交語すること竟日なりて、人の能く測る莫し。

一日、蜀の青城峨眉山に遊ぶを相約す。源荊州より峽を泝^{さかのぼ}らんと欲し、澤長安・斜谷の路を取らんと欲す。源は可ならずとす、曰く、「吾已に世事と絶てり、豈に復た京師を道す^{みち}べけんや」と。澤默然とすること之を久しくし、曰く、「行止固^{もと}より人に由らず」と。

遂に荊州路よりす。舟南浦に次^{いた}り、婦人の錦襦にして鬘^{かめ}を負いて汲む者を見たり。澤望みて泣きて曰く、「吾の此^こを由るを欲せざるは、是れの為なればなり」と。源驚きて之を問う。

澤曰く、「婦人姓は王氏、吾当に之の子と為るべし。孕むこと三歳なり。吾来たらずして、故に乳^うむを得ず。今既に見れば、逃るるべき者無し。公当に符咒を以て我の速やかに生まるるを助くべし。三日浴児の時、願わくは公我に臨め、笑うを以て信^{しん}と為さん。後十三年中秋の月夜、杭州天竺寺の外に、当に公と相見^{まみ}ゆべし」と。源悲悔し、而して為に沐浴^{そな}を具えて服^かを易う。暮に至り、澤亡^しして婦乳む。

三日にして、往きて之を視れば、児源を見て果たして笑う。具つぎに以て王氏に語れば、家財を出して澤を山下に葬る。源遂に行を果たさず、寺中に反り、其の徒に問えば、則ち既に治命有り。

後十三年洛より呉に適ゆき、其の約するところに赴く。約する所に至れば、葛洪川の畔に牧童の牛角を扣たたきて之を歌う有り。曰く、

三生石上 旧ふるき精魂

賞月 吟風 論ずるを要いず

慚愧す情人の遠くより相訪ぬるを

此の身異と雖も性長らく存す

呼びて問うに、「澤公健なるや否や」と。答えて曰く、「李公真の信士なり。然るに俗縁未だ尽きず、慎しみて相近づくこと勿かれ。惟だ勤修して墮せざれば、乃ち復た相見まみえん」と。又た歌いて曰く、

身前身後 事茫茫たり

因縁を話さんと欲するも斷腸するを恐る

呉越の山川 尋ぬること已に遍く

烟棹を却回して瞿塘を上らん

遂に去りて、之ゆく所を知らず。

後二年、李徳裕源の忠臣の子にして、篤孝なるを奏し、

諫議大夫を拝するも、就かず、竟つひに寺中に死す、年八十なり。

〔自注〕此れ袁郊作る所の『甘澤謠』に出ず。其の天竺の故事を以て、故に書きて以て寺僧に遺おくる。旧文煩冗にして、頗る刪改を為す。

【現代語訳】

洛陽の恵林寺は、元は光祿卿の李愷の邸宅であつた。安祿山が洛陽を陥落させた際、李愷は東京留守として殺された。〔李愷の〕子である源は、若い時には高貴な身分の子弟として豪華奢侈なふるまいをし、歌を巧みにして、世間の評判となつていた。〔しかし〕父の愷が死ぬに及んで、悲憤して「出仕しない・妻を娶らない・肉を食さない」という誓いを自ら立て、「元は李愷の邸宅だった場所にある」恵林寺の中にて五十余年を過ごした。

恵林寺には圓澤という僧がおり、富裕にして音楽に精通していた。李源はこの僧と大変親しい付き合いをし、日がな一日膝と膝を突き合わせて語らうこと、他人には推し量れない程〔の親密さ〕であつた。

ある日、〔二人は〕蜀の青城山と峨眉山を訪ねようと約束した。李源は荊州より三峡を遡上しようと考え、圓澤

は長安から斜谷を通る道を選ぼうとした。李源は、「圓澤の提案を」それは駄目だと反対し、「私は既に世事と関わりを絶っているのに、どうして再び京師へ向かう道を取れようか」と言った。「それを聞いた」圓澤は長らく默然とし、「運命はもとより人が決めることではありませんせん」と言った。

そして荊州路より遡航した。舟が南浦に到着すると、婦人で錦のしたばかまを履き、^{かめ}鬘を背負って水を汲む者を見かけた。澤は「その女性を」眺めて泣き、「私がこの地を通りたくなかったのは、この為なのです」と言った。李源は驚いて圓澤に「理由を」訊ねた。

圓澤は、「婦人の姓は王氏で、私はこの人の子にならなければいけません。彼女は妊娠してから三年経ってしまいました。私が来ないので、産めずにいたのです。〔しかし〕今や会ってしまった以上、逃げられる術はありません。あなたは是非とも符咒を使って私が速やかに産まれるよう手伝ってください。そして産まれて三日後の浴児の時に、どうぞ私に会いに来てください、〔あなたに〕笑いかけることで〔転生した圓澤であるという〕証拠としましょう。〔さらに〕十三年後の中秋の月の夜、杭州天竺寺の外にて、きつとあなたとお会いするでしょう」と言っ

た。李源は悲しみ後悔しながら、圓澤の為に沐浴の支度を整え、服を新調してやった。暮れになって圓澤は死去し、婦人は出産した。

三日経ち、「李源が婦人の家へ」行つて見れば、赤子は李源を見て本当に笑った。「李源が」一連の出来事をすっかり王氏に話すと、「王氏は」家財を割いて圓澤を山のふもとに葬った。そして李源は、蜀への旅を全うすることなく、恵林寺へと帰り、圓澤の弟子に訊ねてみれば、「圓澤が」前もつて遺言を残していた〔と分かった〕。

十三年後、「李源は」洛陽より呉へ向かい、圓澤と約束した場所へ赴いた。約束した場所に到着すると、葛洪川の畔にて、牧童で牛角を叩きながら次の歌をうたっている者がいた。曰く、

この三生石の上にいるのは前世の魂を宿した者ですが、風月を愛で吟じる際にあれこれ論じる必要はありません。かたじけないことに古き友が遠方より訪ねてくださった、この身は転生したと言え、嘗ての性情は今も変わらず備わっております。

「李源が」呼びかけて「圓澤どのはご壮健でおられるか」と問えば、「牧童は」「李公は真に信義の厚いお方です。しかし〔あなたの〕俗縁はまだ絶たれておりませんから、

慎んでこちらに近づかないで下さい。ひたすら仏道修行に打ち込み、怠らなければ、きっと再びお会いできるでしょう」と答えた。更に次のようにうたった、

生前のことも死後のことも茫漠として知りようもありませんが、あなたとの因縁を語ろうとして断腸の悲しみに襲われることが恐ろしい。呉越の山川は既にひとしきり訪ねましたので、靄立ち込める川面に棹差して（嘗てあなたと訪ねる筈だった）瞿塘へ向かうと思います。

そして「牧童は」去りゆき、どこへ行ったのか分からなかった。

二年後、李徳裕が「李源は忠臣の子であり、篤実孝行の者である」と奏上し、李源は諫議大夫を拝受したが、その職を辞退し、とうとう寺の中で死去した。享年八十。

〔自注〕 本作は袁郊『甘澤謠』より出で、天竺寺に関する故事なので、当寺の僧に書いて贈った。旧文は煩雑冗漫だった為、大いに刪削改訂した。

【語釈】

① 洛師 洛陽のこと。

② 光祿卿李愷 光祿卿は唐代の官名の一つ。光祿は光祿寺のことで、主に祭祀の供物や宮中の宴会に供する飲食等を司る部門。卿はその部門の長。李愷については「圓觀」訳注⑨を参照。『舊唐書』李愷伝に、天宝十四載（七五五）に光祿卿および東京留守に転じ、尚書省の職務も兼任したと見える（十四載、轉光祿卿・東京留守、判尚書省事）。

③ 居第 邸宅。屋敷。

④ 祿山 安祿山のこと。三ヶ所の節度使（官名。地方の軍事・民政・財政を司り、その地域で絶大な権力を握った）を兼任していた天宝十四載（七五五）十一月、唐王朝に対して反乱を起こし、同年に洛陽を、翌年には長安を占領した。

⑤ 貴游子 貴游子弟と同じく、王侯貴族の子弟・年少者の意。

⑥ 豪侈善歌 豪侈は非常にぜいたくである様子、善歌は歌を得意とする意。貴公子である李源の享樂的な生活を描いたもの。

⑦ 知音 音楽に精通している。

⑧ 促膝交語 「圓觀」語釈⑬を参照。相手と膝を突き合
わせて言葉を交わす。

⑨ 竟日 一日中。終日。

⑩ 荊州 「圓觀」語釈⑲を参照。

⑪ 斜谷 「圓觀」語釈⑱を参照。

⑫ 世事 「圓觀」語釈⑳を参照。

⑬ 南浦 「圓觀」語釈㉓を参照。

⑭ 錦襠 錦のように色鮮やかな下ばかまのこと。「圓觀」
語釈㉔を参照。

⑮ 浴兒 「圓觀」語釈㉔を参照。

⑯ 信 証拠。しるし。

⑰ 中秋 「圓觀」語釈㉔を参照。

⑱ 具 「圓觀」の当該箇所では「つぶさに」と読み、「す
みずみまで」と解したが、「圓澤」では主語が李源に
変わり、前に「圓澤の」為に」とあることから、「そ
なえて」と読み「準備する」の意と解した。

⑲ 治命 遺言。「圓觀」語釈㉔を参照。

⑳ 吳 現在の江蘇省に相当する地域。杭州は越（現在の
浙江省）に属するので、或いは洛陽から見て南方の地
域として、呉を用いたか。

㉑ 葛洪川 「圓觀」語釈㉔を参照。

㉒ 烟棹 「圓觀」語釈㉔を参照。

㉓ 瞿塘 「圓觀」語釈㉔を参照。

㉔ 李德裕 唐の政治家・文人（七八七―八四九）。穆宗治
世に翰林学士となり（八二一年）、その後出世を重ね、
文宗と武宗の代にそれぞれ宰相となった。しかし武宗
の死後、ある事件を巡って重大な過失があると糾弾さ
れ、崖州（現在の海南省海口市）に左遷となり、その地
で没した。『舊唐書』李源伝に、長慶三年（八二三）に
御史中丞の官にあつた李德裕が、李源の孝心を称える
奏上をしたと見える。

㉕ 諫議大夫 「圓觀」語釈㉔を参照。

㉖ 年八十 李源の生卒年や享年は史書に記載されない
が、史書によって李愷の死が七五五年、李德裕の奏上
が八二三年のことであると確認できる。そして「圓
觀」を改変するに当たって、蘇軾は綿密な時間調整を
行っていた。今、「圓澤」の時系列を整理すれば、次
のようになる。

七五五年 李愷の死、李源の入寺

李源と圓澤の交友（五十余年間）

八〇八年 李源と圓澤蜀へ向かい、圓澤死去

八二一年 十三年後、李源と圓澤再会

八二三年 李德裕の奏上、李源任官を辞退

八二?年 李源死去、享年八〇歳

仮に没年を李德裕の奏上と同じ八二三年とした場合、七五五年に襲った父の死を、李源はわずか十三歳(数え年)で経験したという設定になると分かる。⁽¹⁷⁾

一方、原作の「圓觀」では李源と圓觀の交友期間は三十年で、再会の約束は十二年後とされた。こちらの時系列を示せば、

七五五年 李愷の死、李源の入寺

李源と圓觀の交友(三十年間)

七八五年 李源と圓觀蜀へ向かい、圓觀死去

七九七年 十二年後、李源と圓觀再会

八〇〇年 李源諫議大夫を拝受

八〇二年 李源死去

と、かなり前倒しされた設定となっている。「圓觀」には李德裕の奏上は描かれず、袁郊がそれを考慮していなかった可能性はある。一方で、李源は安史の乱以前に宴

遊を司る官職に就いていたと描かれており、その時点である程度の年齢に達している必要性があった。これらの相違が、「圓澤」との時系列のズレにも反映されたのだろう。

蘇軾は二つの史実を忠実に作品へ反映させるべく、交友期間を五十余年と幅のある表現に改め、なるべく「理に適った」時系列の構築を試みたと推測される。曖昧な表現を措かずに修正するとは、理知的な表現を探求した宋代士大夫ならではの対処と言えるだろう。

【注】

(1) 唐代伝奇とは、主に安史の乱(七五五―七六三)以後の中唐・晩唐期に盛んに作られた小説(物語)の類を指す。その特徴について、竹田晃氏は次のように説明する。「単なる記録ではなく、伝奇と呼ばれる作品のほとんどすべてが、〈作者〉の個人的な意識にもとづき、読者に何かを訴えよう、読者に面白く読んでもらおうと筋の展開・構成に工夫がこらされた〈物語〉としての性格を備えたものである」(竹田晃『中国における小説の成立』、放

送大学教育振興会、一九九七年、一〇五頁)、「唐代に入り、中国小説史の中に初めて個人の創作といえる作品群が現れた。これらは作者の個人的な意識に基づき、読者の存在を意識して、話の構成や展開に工夫が凝らされた物語としての性格を備えたものである」(中国文学事典編集委員会編『中国文学事典』、丸善出版、二〇一七年、三四四頁)。

(2) 「三生石」は、前世・現世・来世を超えた宿縁の象徴として、晩唐以降の詩で典故とされた。早期の例に唐・貫休「酬張相公見寄」(『全唐詩』卷八四四)「感通未合三生石、騷雅歡擎九轉金」があり、後世では北宋・黃庭堅「次韻章禹直開元寺觀畫壁兼簡李德素」(『山谷詩註』外集卷九)「三生石上夢、天樂鳴我側」、北宋・積德洪(惠洪とも)「同游雲蓋分題得雲字」(『石門文字禪』卷三〇)「吾聞三生石、曾歌舊精魂。他年葛洪陂、相尋定煩君」等の用例が確認される。

(3) 『甘澤謠』からは、「圓觀」の他に「懶殘」も「唐南嶽明瓚傳」の名で採録されている。こちらも「圓觀」と同様、大幅な加筆が為されている。

(4) 加納留美子「転生する僧侶——蘇軾『僧圓澤傳』

考」(日本宋代文學學會『日本宋代文學學會報』第十集、二〇二三年)。

(5) 『新唐書』卷一五一袁滋伝「袁滋字德深、蔡州朗山人。……子均、右拾遺。郊、翰林學士」、同卷七四宰相相生系表四下袁氏「滋字德深、相憲宗。……郊字之乾、號州刺史」。

(6) 『唐詩紀事』卷六五は袁郊詩四首を載せるが、溫庭筠との唱和詩は未詳。同文に「郊、咸通時爲祠部郎中、有《甘澤謠》九章。與溫庭筠酬唱、庭筠有《開成五年抱疾不得予計偕詩寄郊》云……郊、字之儀、滋之子也。昭宗時爲翰林學士」と。溫庭筠の詩は「病中書懷呈友人」(『全唐詩』卷五八〇)で、序に「開成五年秋、以抱疾郊野、不得與鄉計偕至王府、將議遐適。隆冬自傷、因書懷奉寄殿院徐侍御、察院陳李二侍御、回中蘇端公、鄂縣韋少府、兼呈袁郊、苗紳、李逸三友人一百韻」と袁郊の名が見える。

(7) 『甘澤謠』の収載状況については、李昉等編・張國風會校『太平廣記會校』(北京燕山出版社、二〇一一年)六六八二頁及び李軍評注『甘澤謠』評注』(中国社会科学出版社、二〇一三年)二六六—

二七五頁を参照した。「圓觀」について、程毅中氏は「『圓觀』故事人所熟知、不必引述」と（『玄怪錄續玄怪錄』（中華書局、二〇〇六年）一四頁）、前注6袁閭琨氏らは「書中共載九條異聞奇事、如『紅線』『陶峴』『園觀』等、都是膾炙人口的故事、因而其書在中國小說史上有一定地位」（七三六頁）と述べ、古來著名な作品の一つだと評する。

(8) 『太平廣記』は「圓觀」「懶殘」「魏先生」「紅國（紅綫）」「許雲封」「素娥」「陶峴」「韋騶」の八条を載せる。

(9) 李宗為校点『纂異記 甘澤謠』（上海古籍出版社、一九九一年）六頁、および李軍評注『『甘澤謠』評注』（中国社会科学出版社、二〇一三年）七頁を参照のこと。

(10) 袁行霈・侯忠義編『中国文言小説書目』（北京大学出版社、一九八一年）六三頁、及び袁閭琨・薛洪勣主編『唐宋传奇総集 唐五代下』（河南人民出版社、二〇〇二年）七三六頁を参照のこと。

(11) 本論では簡略な紹介に留めたが、蘇軾の生涯に関する論考には長年の蓄積があり、現代の成果（年譜を除く）に限っても、山本和義「蘇軾の生涯とその文学」（『詩人と造物 蘇軾論考』、研文出版、二〇〇二年）、

林語堂著・合山究訳『蘇東坡』上・下（講談社学術文庫、一九八六―七年）、王水照著・山田侑平訳『蘇軾―その人と文学―』（日中出版、一九九六年）、王水照・朱剛『蘇軾評伝』（南京大学出版社、中国思想家評伝叢書、二〇〇六年）等が挙げられる。

(12) 孔凡礼点校『蘇軾詩集』（中華書局、一九九九年）、同『蘇軾文集』（中華書局、一九九九年）を底本とし、張志烈・馬德富・周裕鍇主編『蘇軾全集校注』（河北人民出版社、二〇一〇年）を適宜参照した。

(13) 一方で、積極的な改変によつて物語に重大な矛盾も生じている。二作品をめぐる改変点や改変に伴うメリット・デメリットについては、前注4の拙稿を参照されたい。

(14) 杭州通判時代、蘇軾は天竺寺の僧侶たちと交流して「雨中遊天竺靈感觀音院」（『詩集』卷七）や「贈上天竺辯才師」（同卷九）等を、知杭州時代には「予去杭十六年而復來、留二年而去。平生自覺出處老少、龜似樂天、雖才名相遠、而安分寡求、亦庶幾焉。三月六日、來別南北山諸道人、而下天竺惠淨師以醜石贈行、作三絕句」（『詩集』卷三三）等を詠んでいる。

(15)

前注4の拙稿では、北宋・釈惠洪『冷齋夜話』巻一〇や孔凡礼『蘇軾詩集』巻三七「次韻聰上人見寄」に引く清・王文誥注の記述を引用し、また現代の研究者の指摘を紹介している。加えて、拙稿の発表後、小野四平『中国近世における短篇白話小説の研究』（評論社、一九七八年）第四章「仏教説話の研究（三）「明悟禪師趕五戒」論」でも「僧圓澤傳」における僧名の変化を取り上げおり、「宋に入ってから蘇軾が「円澤（原文ママ）」と改め、やがてそれが元以降にうけつがれたというふうを考えられてよいであろうことがわかる」（二二三頁）と指摘していたことを知った。拙稿の不備を補う為に、ここで紹介する。

(16)

蘇軾「圓澤」（二〇九一年以前に制作）を境に、後世の文献では、北宋・朱勝非『紺珠集』巻二「圓澤」、北宋・曾慥『類説』巻三六「甘澤謠」「圓澤爲孕婦子」、南宋・胡仔『苕溪漁隱叢話』前集巻五六「圓澤」のように、「圓澤」と題する文献が複数確認できる。また「圓觀」と表記する場合も、北宋・釈惠洪『冷齋夜話』巻一〇「觀道人三生爲比丘」（蘇軾「僧圓澤傳」にも言及）、南宋・陳元靚『歲時廣

(17)

記』巻三三中秋下「游峨眉」（東坡詩及他本作「圓澤」と注）のように、蘇軾「圓澤」にも言及する傾向にある。

『舊唐書』李源伝には「源時年八歳、爲賊所俘、轉徙流離、凡七八年。及史朝義走河北、洛陽故吏有義源者、贖之於民家。代宗聞之、授河南府參軍、轉司農寺主簿。以父死禍難、無心祿仕、誓不婚妻、不食酒肉。洛陽之北惠林寺、愷之舊墅也、源乃依寺僧、寓居一室、依僧齋戒、人未嘗見其所習」と見える。曰く、李源が八歳の時に安史の乱に遭い、賊に捕らわれたまま各地を七、八年間流浪していたところ、洛陽で父親の部下だった役人に救われた。その後幾つかの官職を歴任する一方で、惠林寺に身を寄せ、極めて節制した生活を送った、と。蘇軾「僧圓澤傳」には前半部に関わる記述は見えないが、李源が史書の記述通り八歳から八年ほど流浪したとすれば、惠林寺に身を寄せた時期は蘇軾「僧圓澤傳」の設定と殆ど変わらない年齢だったことになるか。

（本学講師）